
リアルな夢

二三歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルな夢

【Nコード】

N7868Y

【作者名】

二二二歩

【あらすじ】

ひと月前、私はリアルな夢を見た。

夢の中に現れた男は、「クリスマススイブの夜にここで会おう」と誘ってきて?!

現実と夢の狭間に揺れ動くアラサー女性のお話です。

ひと月前、私はとてもリアルな夢を見た。

夜車に飛び乗り、湾岸沿いの道路を走っていた。行き先を考えず、ただ車を動かしていた。私の横をオートバイが走り抜けていく。

しかし、そのバイクは、私の前をゆっくり蛇行走行し始めた。頭にきた私は、クラクションをしつこく何度も押ししたり、バイクを追い越そうと試みたが、無駄だった。

諦めて途中で車を路肩に止め、浜辺へと降り立った。そのまま、夜の海に誘われ、ぼんやりと海を眺めていた。

すると、バイクの男がやってきてヘルメットを脱いで私の横に立った。

「目的地もなしで、あんな乱暴な運転するなんて、車が可哀想だ」
渋い低音の声で優しく話しかけてきた。

「そうね、可哀想ね」

何故か私は素直に応じている。男の年齢は二十八から三十オヴくらい。白いシャツに、黒皮のライダーズジャケット、そしてジーンズという格好をしている。ホリは深く刻まれ、瞳はもの憂げで、鼻はすらつとして高い。どこか異国の血を引いている、そんな顔立ちだった。

「海の音って、何故か闇の音ね」

「うん、そうだね。だから、君はこの闇の音を聞きに来たんじゃないか」

夜空には星は瞬き、海の波は月の光を浴びて輝いている。
とても静かな夜だ。

「違うのよ。一人だからよ。みんな、結婚してしまったから一人になっちゃったの」

「結婚ね。俺も友人はみな結婚してしまったから、独りさ」

男は、自らを自嘲するかのようにふつと笑った。

「どうだろう。クリスマス・イヴの夜、ここに来てくれないか。俺はシャンパンと赤いバラの花束を持ってくるから、君はグラスを用意してきてくれないだろうか」

約束だと言って、男は消えてしまった。

その夢のことはすっかり忘れていた。そして、私もわざわざ人に話したりしなかった。

そして現在、十二月四日。今年のパーティーはいつにしようかと言って、数人の友人に電話をかけたが、皆パスという返事ばかりだった。その大半は、新婚ホヤホヤだからパートナーと過ごしたいとか、来春挙式予定の婚約者とデートするとか、だいたい男絡みの理由で断られた。

昨年だったら、まだ許せた。イヴの夜は金曜日で、仕事があったから……。

ところが今年は土曜日で休みなのだ。繁華街に出て人様の幸せな光景を眺めるには、独り身の私にとって辛すぎる。

今までのイヴの夜は、本当に幸せだったと思う。特に十代後半から二十代前半までが、幸せだったのかもしれない。十代の頃は友人を呼んでパーティーを開き、プレゼント交換をした。また、二十歳になってクラブに遊びに行ったりもした。来年で三十才になる私は、一人クラブに行く勇気がない。

だけど本当に幸せと感じたのは子供の頃だったかもしれない。おばあちゃんが熱心なクリスマスチャンで、教会のキャンドルサービスに連れて行ってもらった。

小学校四年生になって、初めてろうそくを片手に持った時の嬉しさは何ともいえない。

溶けたろうそくを牧師さんの説教中にさわって遊んでいたっけ。話そちのけで夢中になっていた。

そして、しーんとした寒空の中をおばあちゃんの暖かい手にひか

れ、私は帰って行った。

夜道を歩くことは行きも帰りも、冒険しているみたいにわくわくしていた。

今さら、教会なんて一人では行けない。

今度、教会に行く時は結婚する時だと秘かに決めているのだから……。

毎日、何も考えないようにして仕事に没頭していたので、クリスマス・イヴはあつという間にやってきてしまった。

その日、お昼に起きて冷蔵庫にあるもので簡単に食事した後、部屋の掃除や洗濯をして時間を過ごした。

夕方になって、買い物に行く気力が出たので、少し豪華な夕食を作ろうと商店街に足を向けた。店先では、クリスマス・ケーキやシヤンパンが売られている。

シヤンパン。

その時、男の姿が思い浮かび、勝手に足が自宅へと向かっていた。家に着くなり、クローゼットの中からドレスとアクセサリを引張り出していた。自分が自分でないように性急にドレスとアクセサリを身につけていた。

そして、鏡を見た瞬間はっとした。いつもより、念入りに化粧をしていたのだ。

あてもないのに。

でも、ひっかかる。

そのまま私はシヤンパングラスを二つ揃えると、車に飛び乗った。行き先はもちろん由比ガ浜である。

あれは夢なのよ、と自らに言い聞かせる一方で、

(でも、もう一度彼と会いたい。もしかして、行けば会える。そうよ。きつと会える)

と期待に胸を弾ませている。

二つの気持ちがあぶつかり合いながら、約束の浜に辿り着いた。しかし、誰もいなかった。

しばらく、車の外に出て待つてみることにした。

風は冷たく、海は荒く、波が立っている。

私は寒空の下、一時間程男を待ち続けたが、目的の人物はなかなか現れない。

身体がすっかり冷え込み、節々が痛くなってきたので、諦めて車に引きあげようとした。

「やっぱり、来ないね」

一言もらすと、涙がはらりと頬に流れ落ちた。

私は一体、何を期待していたのだろう。何を信じていたのだろう。やはり、夢は夢で現実にはならないのだ。

子供の頃、サンタクロース必ずいると信じていた。自分は将来、世界をまたにかけるピアニストになれると信じていた。

いずれも、憧れや夢しかなかったのだ。

(来るんじゃないかった)

私はまたしても絶望を見せつけられた。

夢は現実にはならない。

待つのを諦めて、帰ろうとエンジンをかけようとしたその時。

「ちょっと、待って！」

一人の男が私に向かって駆けて来た。男は白い息を弾ませ、車の前で立ち止まった。

びっくりした私は車から降りて、傍に歩み寄ると男はタキシードを着ていた。

「遅くなって、ごめん」

男の左手にはシャンパン、右手には赤いバラを持っていた。夢の

中で私と約束をした男に違いなかった。

「ああ、来てくれたのね」

嬉しさのあまり声が上がると、男の目元が優しくなった。

「でも、本当に来てくれるとは思っていなかったよ」

「私も……。でも、夢なんかじゃないわよね？」

「当たり前さ。何を言ってるんだい」

男は私のこめかみを、コイツとばかりに指で突く。

「ところで、グラスは用意してくれた？」

「ええ、持って来たわ」

私たちは波打ち際に座り込み、シャンパンをグラスに注ぐ。それぞれグラスを持ち、高々と上げると、

「メリー・クリスマス！」

二つのグラスが重なり、チンと音が鳴る。

私は一口シャンパンを飲み干してから、男の顔をじっと見つめた。

「でも、今あなたとこうしているのは現実なの？」

「君は疑り深い性格なんだね」

少し呆れた表情を浮かべた。

「人は夢を実現してしまう力を持っているのだよ」

そう言って、彼は私に優しく微笑みかけた。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7868y/>

リアルな夢

2011年11月23日14時47分発行